

**40年の企業経験を
途上国で生かしたい**

赤、青、黄、緑……。色鮮やかなプラスチックのブロックを囲み、数人の大人たちが熱心に議論している。「これは右に置いた方がいいんじゃないか」

「いや、そうすると、こっちが取り出せなくなる」
「じゃあ、すぐ使わないから奥にしまっておこう」

世界的に子どものおもちゃとして人気の「LEGO」。それを大きな男性が、右へ左へと動かしている光景は何とも不思議だ。

「この倉庫を効率的に機能させるために、あと何を整理すればいいんだろうか」

そう語り掛けるのは、シニア海外ボランティアの家木幸一さん。派遣先は、ヨルダン大学の中に国家プログラムの一環で設置された、産業界の人材育成機関FFF。生産管理マネジメントを指導している彼は、FFFスタッフの能力強化に加え、現地企業の生産性向上を目指し、カイゼンの巡回指導、企業診断セミナーの開催など精力的に活動している。

家木さんは日本有数の総合電機系メーカーの出身。約40年にわたり、技術職からマネジメントまで幅広い業務を経験した。定年退職後も、自分の経験・

知識を生かせる場を探していたが、日本国内では「なかなか活動の場が見つからなかった」という。そこで出会ったのがJICAのシニア海外ボランティア。「会社の先輩から途上国で社会貢献ができる道があることを聞いて、第2の人生のステージとして挑戦してみよう」と思いました。

近年、経済発展が急速に進むヨルダンでは、特に中小企業の人材育成、生産性向上が重要な課題となっている。そこで期待されているのが、日本の高度経済成長を支えてきた「カイゼン活動」の導入。「カイゼン」や「5S」という日本語が通じるほど、理論は理解されています。でも大学を卒業してゲンバを知らずに管理職になるケースが多く、なかなか実践につながっていないのです。

カイゼンがすべての企業活動のベイスになるのは周知の事実。しかしこの国では、日本企業では当たり前のことが一筋縄にはいかない。「日本では上司と部下、そして仲間同士が協力し合っていて、5Sを実践する習慣が根付いています。しかしヨルダンの人たちは個人の主張が先行してしまい、集団で何かをすることが得意ではないようです」。カイゼン活動は、社員が一丸となって行うもの。どのようにすれば、それを彼らに理解してもらえるだろうか。「誰でも」が「ここ」がダメ。あそこが汚れている。などと、他人から指摘される

シニア海外ボランティア
IEKI Koichi

家木 幸一 さん

ヨルダン南部の港湾都市アカバの職業訓練センターで、レゴブロックを使った5Sトレーニングを指導する家木さん



のは面白くありません。日本の方法を押し付けるだけではダメ。彼らのプライドを傷つけず、自主性を引き出せる方法を模索していました。

**レゴブロックを使った
5Sトレーニング**

試行錯誤の末、家木さんが考案したのが「レゴブロックを使った5Sトレーニング」。おもちゃのレゴを仮想の倉庫に見立て、在庫の配列や不用品の仕分け、運搬方法などの効率化をブロックを動かしながら考えるというものだ。「仕事場から離れた環境で、和やかな雰囲気での5Sの基本を身に付けることができる。さらにグループワークを通して、カイゼン活動に必要不可欠な「仲間意識」をはぐくむことも狙いでした」。さらに家木さんは、レゴトレーニングで習得した5Sの知識を実践に結び付けるために「5S自己採点評価法」を取り入れた。「5S関連で改善しよう

とする項目を5〜10個決めて、項目ごとに5段階の採点表を作るんです。そしてそれぞれの職場で、この期間でここまで改善するといった計画を立て、定期的に状況を自己評価してもらいました」。5Sは人が決めたり指摘されたりするものではない。社員一人一人が主役となり、地道に努力していかねればならない。これは、家木さんが日本企業で体感したこと。まさに「ゲンバ」から生まれたアイデアだ。

最初のころは、どんなにカイゼンの効果について説明しても「メイトを雇っているから、タバコの吸殻を捨ててもいい」という人もいた。しかし今では「会社で新しく5Sを始めたとか、週末に近所の人を集めて掃除をするようになったとか。一つ一つの変化がうれしいですね。家木さんの指導の下で始めた5Sを実践し続けた企業が、ヨルダンの優良企業としても表彰されている。

いえき・こういち

1940年旧満州生まれ。総合電機系メーカーを定年退職後、JICAシニア海外ボランティアに参加。ヨルダン(2003年10月~05年10月、2010年1月~現在)とエジプト(07年11月~08年2月、08年10~12月)に派遣。民間企業のTQM(総合的品質管理)推進に携わる。



「5S自己採点評価法」を採用した肥料会社の視察。職種柄、ほこりが出やすい職場がきれいに清掃されていた

「若いころから積み上げてきた技術や知識が、異国の地で役立てられるなんて思ってもみなかった」という家木さん。「自分の提案が受け入れられた時の喜びは、日本では体験できませんね」と笑う。休みの日には、趣味の絵を子どもたちに教えるなど、現地の生活で得た人とのつながりはかけがえのない宝物だ。

「現地の人と心を通わせ、共に考え、同じ目線で仕事に取り組み。そうしているうちに、若いころの活力がよみがえる気がするんです」

家木さんにとっても、ヨルダンでの活動は、自身の仕事人生の「カイゼン」につながっているのかもしれない。



「仲間意識をはぐくみ生産性向上を広めたい」

長年、まさに日本企業のゲンバで「カイゼン」を実践してきたシニア海外ボランティアの家木幸一さん。その経験や知識を生かし、現在、中東のヨルダンでユニークな手法を取り入れたカイゼン活動に取り組んでいる。

第20回

ゲンバの風

